身体運動とその知覚に相即する環境のポリティクス
1920年代のルドルフ・フォン・ラバンの著作と振付に関する一考察

信州大学　斉藤尚大

ラバンにとって，舞踊は映画という機械では捉えられないものだった。映像は，ダンサーの制御する時間，ダンサーの動きとその形態を十分に捉えられないからである。身体の全体性，身振りの連続性および三次元性といった舞踊の固有性の映像による破壊とは，固有の媒体を持ち，他の芸術ジャンルから独立した芸術として舞踊を確立しようとしたラバンとしてはもっともらしい批判だ。だが他方ラバンは，まさに舞踊が独立した芸術であるために，その映像を通じた記録方法を模索していた。彼は，三次元のイメージを与えることのできる「キネトスコープ」と呼ばれるプロジェクターのドローイングを残し，また自らの記譜法を解説する映画の撮影を計画していた。さらにラバンは，舞踊映画の構想も練っていた。『人間の身体の調和的運動に関する映画』と題された草稿において，身体部位のクローズアップ，ラップ・ディゾルヴ，身体運動と幾何学的形態，自然界の形態，さらには機械の形態のスーパーインポージョンにより，ラバンはむしろ積極的に映像の文法に身体運動を適合させようとする。

この相反する態度は，20年代に自律した舞台芸術として確立されようとしていたドイツの舞踊が，その座を争う対象の問い直しをせまる。舞踊が自らを差異化すべき対象としては，音楽，詩，演劇，パントマイムが想定されていた。だが，自律芸術としての舞踊に関するラバンの著作や振付作品は，視覚メディアが身体に対して持つ効果と絶えず緊張関係を保っていた。ヴァルター・ベンヤミンによれば，「複製技術の時代が芸術を，その礼拝的な基盤から切り離したことによって，芸術の自律性の輝きは永久に失われた。」だが，舞踊を遅れてきた自律芸術として確立することは，複製技術，特に視覚メディアが開く身体空間に対し，身振りとその知覚に相即する環境――重さと可視的な明るさ――の組織を通じて，記号としての身体の魔術的価値および舞踊のモニュメンタリティを賭けることであった。

1926年の著作『コレオグラフィー』において，ラバンは舞踊固有の媒体である身体運動を形態変化に還元しようと試みているが，その作用子である，イコザエダーの中で運動の調和的展開を実行するダンサーの裸体は，写真によって様々なイデオロギーを差異化する記号となっていた。裸体文化から剥離した太陽光に照らし出される身体は，フリーメーソンの参入儀礼を通過し，霊的に照明された身体であった。ヘッケルやダーウィンの生物学の影響を受け，ラバンは結晶を特権的表象としており，ダンサーの自我は，植物，動物へと続く自然界の階梯から，古代密儀宗教的な理性のダイモンに目覚めることで生成する。

またラバンは，ダンサーの身体運動を観客が明晰に三次元的に鑑賞できる舞踊専用劇場を，この過程に観客も参入する祝祭的儀礼空間として構想していた。だが結局，舞踊劇場は動く建築として，モニュメンタルな社会的身体へと回収される。それは，ダルクローズとアッピアがヘレラウで展開した表象のエコノミーに従属しているものの，進歩する映像メディアが形成した「非感性的類似」としての模倣の能力（ベンヤミン）がもたらす「アイステーシス」による分節されている。

22年12月ハンブルクのコベントガルテンで上演された『揺れる神殿』に代表される群舞作品で，ラバンは複雑なリズムで，体を密集させる振付を行い，これにより観客の視線は漂うことなく舞台の一部に固定された。特に『揺れる神殿』での色彩の闘争の効果を，フリッツ・ベーメはノヴェールから抽象色彩映画への変化として位置づけている。脱主観化された感情の結果が表現であるという美的モダニズムの表現理論で捉えられる表現の水準で，観客は色彩と明暗のコントラスト，運動の形態を抽象映画として自らの身体において再演する。また，ラバンの舞台は無歴史的・多歴史的に構成されており，その時間の錯誤において，映画の展開する，カットによっていつ始まるかもしれずいつ終わるともしれないイマジネールなものに接近していく。

映像が身体運動の流れを固有のやり方で保存しえているのに対し，舞踊する身体はそのエフェメラリティによってそれを記憶しえないという不可能性において映像たることを欲望している。だがむしろ，「常に異なる仕方ではあるものの新しいものを実行＝パフォームし，反復的他者性において再生産する能力（マーク・フランコ）」としての舞踊は，身体運動とその知覚に相即する環境，例えばユベール・ゴダールの言う「重さの転移（transport）」において，映像メディアとは異なるポリティクスを展開していたのではないか。この問いは，ナチス政権下におけるラバンの言説および演出と，ナチスによる「政治の美学化」について，ベンヤミンの危惧を念頭におきつつ考察することで，さらに探求可能であろう。